

『とりかへばや物語』小論

福 留 步

『とりかへばや物語』（現存するのは、『古とりかへばや』の改作本である『今とりかへばや』だといわれている）は、容貌の酷似した男女二人が、男君は女性的であるため女装し、女君は男性的であるため男装して育てられ、やがて累進して右大将となった男装の女君や尚侍として宮仕えする女装の男君を中心にして、同性愛や色濃い官能描写が見られるため、頽廢的作品の代表のようにいわれるが、人がこの作品に接した時、この物語が頽廢的な愛情描写だけではなく、親子愛や兄妹愛といった倫理的な愛情描写をも多く含んでいることに気付くであろう。

従来『とりかへばや』に対する評価は、藤岡作太郎博士がその著『国文学全史平安朝篇』において、

人情の微を穿てるところなく、同情の禁じ難きところなく、彼

此人物の性格十分に發揮せず、たゞ叙事を怪奇にして、前後応接に暇あらしめず、つとめて読者の心を欺瞞し、眩惑して、小説の功成れりとす。その奇変を好むや、殆ど乱に近づき、醜穢読むに堪へざるところ少からず。敢て道義を以て小説を律せんとするにあらず、その毫も美趣の存せざるを難するなり。殊に甚しきは、中納言が右大将の妻の四の君と通じ、また右大将と契るところなど、たゞ嘔吐を催はすのみ。

と、その頽廢性のみを大きく指摘した言葉に代表される。しかし近來、この作品に色濃く表わされている親子・兄妹間の倫理的愛情の面から、『とりかへばや』を再評価しようとする傾向が出て来ている。

鈴木弘道氏は、その著『平安末期物語の研究』の「とりかへばや物語に現われた愛情」の中で、『とりかへばや』における愛情を列挙して、頽廢的愛情と倫理的愛情に分類し、さらに前者を恋愛（異

性愛」と同性愛に、後者を肉親愛・夫婦愛・仇敵その他に対する愛に分けている。そして、鈴木氏は『とりかへばや』における倫理的愛情描写を重要視している。

『とりかへばや』の倫理的側面に着眼した人々は、鈴木氏の他にもいる。まず田辺つかさ氏が、その論文「取りかへばや物語の怪奇性その他」^(注)において、

かの巻末の、母と子のくさびの挿話の如きは、今取りかへばやに改作した筆者のみがもった人情主義の出現であらうと思はれる。

と述べ、また、塩田良平博士がその著『古典の伝統』に収められた「とりかへばや物語」において、

末章、中官が宇治に残して来た愛子をかき撫でながら、それとなく母の健在を知らせる辺りは、源氏にすら見ることを得ざる当代随一の母性描写であり、写実に徹して読者をして泣かせずにはおかない。

と記し、また、中村真一郎氏がその論文「『とりかへばや物語』を廻って」^(注)において、

人は此の不出來な物語の中に、当時の没落貴族の親子や夫婦の間の素朴で強烈な恩愛の絆を、芸術の外で知ることが出来る。とも述べている。

倫理的愛情の中で特に主流を占めると思われるのは、左大臣の子に対する愛情や兄妹愛、そして宇治の若君に対する女大将の愛情である。

この物語は、容貌の美しい二人の子供がありながら、女性的である若君を見ては「いとあさましきことにおぼしの給はせてつねにさいなみ給」う一方、男性的姫君を見るにつけても、「返く／＼とりかへばや」と思う父大納言の嘆きに端を発している。「返く／＼とりかへばや」と願って、不自然な男女の性的倒錯をしいて断行した父親としては、十歳以上になっても人並みでない我が子の様子に苦悩する。若君(女)の横笛の音を聞いて、「心ちもかきみだれ」「『あないみじ、これももとの女にてかしづきたてたらんに、いかばかりめでたく、うつくしからん。』と、むねつぶれて見給ふ」父の姿から、いかに彼がその不遇の子を溺愛していたか察せられるのである。そしてまた、宣耀殿に出入りするようになった尚侍(男)の美しさを見た時に、父親として喜びと誇りを感じながらも、「うれはしうもかなしくも」あるという複雑な心境になるのである。

人並みでない我が子の将来を心配する父親は、二人を仏道修行に出すことによって、彼等の将来に対する不安を解消しようとするが、溺愛している子供達を、容易に出家させたくないという新しい苦悩を生じるのである。しかし最後には、「よに／＼つたなかりけるすくせ」に一切を委ねようとする諦観になる。

だがこの諦観も、帝(後、朱雀院)や春宮(後、帝)から若君(女)を官途に就かせるように催促があると、女性であるという事実には進まず、「いまだいわけなきさまをそうして、とりいで給はぬ」という苦策を考えたり、また、姫君(男)を入内させよと言われると、「せんかたなき御ものはちにことよせ」たりしなれば

ならない苦痛となり、しかも、そういう思召しがあると「あはれかゝらましかば、いかにめいぼくあり、うれしからましょと、くちをしなく心うきものから、すこしほゝゑまれてぞきゝ給ふ」とか、「げにさやうにもてかしづきてあらましかばと、いみじき御ものおもひ」であるというように、宿命だと諦めようとしながら、諦められない父大納言の姿は、子供ゆえに思い迷う人間の姿をまざまざと見せてくれるのである。

また、人並みでない二人兄妹に対して、「このふた所のほかにはまたたぐひもなし。我世もしらぬを、よづかぬありさまも、ことにいひあはせ給はんよりはかたみにうちかたらひつゝこそ、すぐし給はめ」という忠告を与えるが、これが後に美しい兄妹愛を生じさせる動機ともなっている。

また、世間体を考えて非難されないような振舞をするということでは家の面目を保つ上で必要であり、これを強く感じていた左大臣が、一般子弟の守るべき事項について教訓している場面も見られる。そしてまた、中納言(女)の吉野滞在中は、父左大臣は心配のために涙ぐんだり、尚侍(男)が行方不明の大將(女)を捜しに出る際にも、母北の方は、「なほ侍らんかぎりは、さまかへむとなおぼしそ。たのむかたなきおのれをふりすてたまふて、かへりて御つみにもならむ」と涙ぐみつつ手紙を書いたりする場面などは、愛する子供が親許を離れている時の、いつの時代でも変わらない親の寂しさをよく表現している。

このようにこの物語の作者は子に対する親の愛情を十分描いてい

るが、また子供の親に対する愛情描写も欠かしてはいないのである。

中納言(女)は、人並みでない身を自覚していた時から、「我身ひとつのことをおもひつゞくるに、これよりいでゝ、やがてふかき山に、あともたえなまほしくおぼさるまゝに」という出家こそが、念願であった。その出家が、女主人公の名ばかりの妻である四の君と宰相中將の密通事件が起こって、ひどい孤独地獄に落ちた時ですらも出来なかったのは、父母への愛情からであった。そして後に、自らも宰相中將に身を許した時も、愛情深い両親を思って出家を思いとどまったのである。

尚侍(男)の、親を思う情も大將(女)に劣らず深く、自ら本来の男姿となって行方不明の大將(女)を捜そうと決心するまでの心の動きは、肉親愛に満ちている。尚侍(男)は、大將(女)の失踪のために心を痛めている父を見るに忍びず、その心配することを察して自らの計画を内密にしているが、母にだけは自分の決心を語って、子供として行き届いた思いやりを見せている。

尚侍(男)と大將(女)は、二人の性格・行動が人並みでなかった上に、お互いに取り替わっての変装ということで、前述の父左大臣の忠告もあって、一般の兄妹よりも一層強い愛情で結ばれている。宰相中將が尚侍(男)を女と思って懸想して色々口説くことがあった時も、大將(当時、侍従、女)は妹(実は兄)のことを考えて、「いたくもあひしらはず、ことすくなる様であった。また、梅壺女御の立派な様子を見るにつけ、自分は仕方がないが、姫

君として育てられている人だけでも正常であれば、親も力の入れる甲斐があるというものと残念に思ったり、宣耀殿では、「我身はさるものにいひおきて、『此御ありさまをたに、れいの人にみたてまつらばや』と悲しく思うのは、自己の存在を否定してまで妹（実は兄）を生かそうとする犠牲的な愛情の現われである。また尚侍（男）の方も、「この御ありさまを見るたびごとに、むねうちつぶれつゝ」、思い乱れているのである。この兄妹愛の深さは、彼等が人並みではないという点から出ており、互いに同情し合うのは、人並みでない自身の嘆きを相手により深く感じるからである。尚侍（男）の兄思い（実は妹思い）は、自らその恋人である春宮（女一の宮）を捨て、男妾になつた大将（女）を捜してに行く時の心境に最もよく表現されている。「この君をたづね出さずば、わが身も世にかへるべきにもあらずかし」と思い、そして、「人はたゞ、おほかたのよのひゞきばかりこそあるくめれ。……たづねえずなりなば、やがて我身もかたちをかへて、ふかき山にあとをたえなん」とも思い、母にも「やう／＼にく／＼たづねもとむといへど、おほかたひゞきのみして、いかほど心ざしのなきにこそあらめ。さるべきにてこそはらからとなり侍けめ。などてか、心をいれてもとめむに、たづね出さぬやう侍らん」と話しているが、この言葉には、強い兄妹の絆が感じられる。大将（女）と尚侍（男）は、言ってみれば、互いが一個の人間の半身のようなもので、互いに相手がいなければ困るのである。盲目的な両親の愛情によって、彼等は必要以上に互いの存在を意識しているように思われる。左大臣の子供に対する愛情

も子供達の親及び互いに対する愛情にも、何か動物的感じを受けずにはおれない。彼等は、血のつながりの中だけで、強烈な愛情表現を展開させている。この兄妹愛及び彼等の両親に対する愛情は、兄妹それぞれの恋人への愛よりも、この物語では大きく扱われている。

宇治の若君に対する大将（女）の愛情の強さを見る時、人はこの作品が遊戯的好色の物語であることを忘れるのではあるまいか。この宇治の若君は、大将（女）が中納言（後、宰相中将、内大臣）に契られて共に宇治に身を隠した当時生まれた子で、大将（女）は、「この若君をいとかなしげにおぼして、常にいただきあつかひ給い、幾度も中納言の隙を見て吉野へ逃避しようとしては常に「この若君のすてがたく、うきよのほだしつよき心ち」に胸を痛めていた。しかし、尚侍（男）の来訪は、ついに大将（女）に「おやこの御ちぎりたえぬものなれば、ゆきあひつゝみぬやうにもあらじ。さばかりなりしわが身の、このちごかなしとて、いとかく人げなくて、かよはむをわづかにまちとりて、すぐべきかは」と、決意を固めさせるが、実際に大将（女）が尚侍（男）と共に宇治から脱走するに至るまでの、母としての大將（女）の心情には悲痛なものがある。例としては、「わか君をめかれず見給ふに、いみじくをかしげにて、やう／＼ものがたり、人のかほまもりて、ゑみなどするを見るぞ、いみじうかなしかりける」とか、また、「出給ひぬれば、若君いできて、つゆまどろまずなきあかし給ふ」とか、「宮にせうそこきこえ給ふとて、ひぐらし、此若君をつといただき給ひつゝ、忍び

てうちなきなどし給ふ」、そして、「兄此君をつとまもらへてかきくられ、かなしと人やりならずおぼすに」といった描写があり、そこには子を思う母の心情が満ちている。そして、いよいよ宇治から離れる時には身を切られるような思いをして、愛しい子を乳母に抱き移し、「若きみのおもかげは身にそひてひきかへさるゝ心ちしながら、くるまにたてまつり」、吉野へ着いた後も、「あけくれ見なれしかぎりなく、やまぐちしるかりしかほつきぞこひしく」思うのである。

大将(女)の宇治の若君への愛情は、物語の結末に至るまで描写されている。京都に帰った大将(女)は本来の女性として今尚侍になるが、帝(元の春宮)の愛を得て懐妊しても、思い出すのは宇治の若君のことであり、帝との間に何人子供が生まれても、宇治の若君への思いは消えず、成長した様子を実際に見ては、「御心のやみは、いみじうかなしうなむ、見奉り給」うのであった。この物語の結末には、中宮となった今尚侍(元の大将、女)が宇治の若君を見て、「あはれに、しのびがたく」、「君の御は」と聞えけん人は、しり給へりや。大納言はいかゞの給」と聞き、「君の御は」はさるべきゆかりある人なれば、御ことをいとわすれがたくこひ聞ゆめるを、見るが心ぐるしければ、かく聞えつるぞよ。大納言などには、今はよになき人とぞしり給へらん。さこそありしかとまねび給ふなよ。たゞ御こゝろひとつに、さる人はよにあるものとおぼして、さるべからん折は、此わたりにつねにものし給へ。しのびてみせ聞えむ」と語る場面は、大変優れた母性描写である。宇治の若君は、大

将(女)の悲痛な思いの結果、捨てられた子であるから、その後も若君に対する大将(女)の思いは増すばかりであった。物語前半は左大臣の子供達に対する愛情の深さや兄妹愛の強さが出ており、物語後半に大きく写し出されてくるのは、この宇治の若君に対する女主人公の母性愛の強さである。以上が、この物語の倫理的愛情描写の主なるものである。

この物語は、藤岡博士の指摘したような頽廢性と、同時に相反する倫理性をも含んでいる。はからずも二つの相容れざる要素がこの物語は含んでいるのである。鈴木氏が「如何にこの物語の倫理性が強調されようとも、その頽廢性は飽くまで否定することは出来ない」と述べている。この物語の「頽廢性」について、その主なる描写を挙げて述べていこう。

二

『とりかへばや』の主人公達の男装女装は、この物語の特異性を最もよく印象づけてはいるが、こうした趣向はさして珍しいものでも、全く現実離れをしたものでもない。平安末期は、全くの暗黒時代であったから、没落の一途をたどる貴族階級は猟奇的趣味に耽溺したり、官能的な美的享楽を追究するか、俗界を捨てて出家をするか、いずれかの道を踏まねばならぬ運命にあった。猟奇的精神は『今昔物語』などにしばしば見られるような、妖怪・変化などの猟奇談として現われ、『病草紙』や『地獄草紙』・『餓鬼草紙』などの特異な絵巻物も現われるようになった。また官能的な美的享楽の

追究は極端な華美を招き、男性の女性化も目立ってきた。『今鏡』「御子たち第八」の「花のあるじ」には、鳥羽院や源有仁の華美を好んだ様子が描かれ、『海人藻芥』巻之下には、男性も女性に倣って眉を抜き黒黒めをしたことが記されているし、『源平盛衰記』や『平家物語』にも、これに類する描写が見られる。また、『平家物語』にも記されている白拍子に窺われる女性の男装も、平安末期における頹廢的世相の現われであり、この他、男色といった風潮も現われてくるのである。ゆえに、『とりかへばや』における變成男女や同性愛といったものは、時代を反映したものと見える。

『とりかへばや』においては、同性愛と見えるものが実は異性愛であり、異性愛と見えるものが実は同性愛であるという複雑さがあるが、ここでは同性愛を中心に頹廢的愛情について述べていきたい。

男装の姫君の行動には変態的な面が見られる。彼女は男装という形で、多くの女性を惑わせ、これらの女性達に、恋愛関係を結んでいると思わせることに快感を覚えている。

最初に、四の君と結婚した姫君は、所詮同性であるから、「よるの衣も、人めにはうちかはししながら、かたみにひとへのへだてはみなありて、とくるかたなき」様子であったが、「うとまじきもてなしもなく、たゞいとあはれげにうちかたらひ」満足を感じるという倒錯に陥る。二人の間柄は、四の君の乳母左衛門の眼にも夫婦としてではなく、同性愛的関係に映っていた。

また、五節に中院の行幸があった時、男装の姫君は、麗景殿の細

殿で女御の妹から懸想文を受け取る。女御の妹は男装の姫君を男性と想っているから、正常の恋愛感情を抱くのは当然だが、女性である姫君が、「なのらずば誰としりてかあさくらやこの世のまゝちぎりかはさん」などは真に言い切れるはずはないのだから、やはりそこには性的に倒錯した感情があると見てよからう。

そしてまた、吉野の宮の姫君達と贈答歌を交した男装の姫君が、御簾の中へすべり入った様子に驚いた姫君に対して、「世中にめぐらひ侍らんかぎりは、いかで心ざしのかぎりをつくして、御らんぜられにしがなとおもひ給ふるには、あまりおぼつかなく、へだておほかる心ちして、いぶせく侍りければ、たゞうらなく、我も人もうとかるまじきよしを、おもひ給へよりてなむ」と口説くが、この言葉も同性愛的感情が入っているように思われる。そして、彼女は姫君達を「世のつねめかしくひきとゞめて、たゞうちそひふして、このよならずちぎりかたらひふし」で満足するのである。しかもこの女主人公は、吉野の姫君達が「もろこしの人めかしくけどほく、人に、ぬ所やなどゆかしさに、かばかりみだれ」たのだから、ますます変態性が窺われる。また、後期の文に、「いまのまもおぼつかなきを立かへり折てもみばや白きくのはな」と書いたり、帰京に際しては、姫君達に対して繰り返し限らない志を契り交し、「しづ心あらしに身をぞくだかましきゝならひぬる嶺のまつ風」と文をやるどころなどは、全く同性愛を示している。

これに対して、女装の男君の場合は、春宮（女一の宮）との関係は実質的には恋愛であるし、女装の男君を眞の女性と想って恋する

宰相中将と帝に対しても、変態的感情が動いてはいないから彼自身は正常な精神を持っていることになる。

男性で同性愛的感情を持っているのは宰相中将である。宰相が男装の姫君を見て、その比類なき美しさに「かゝる女のあらましかば」と思ったり、「けちえむにこまやかなるけはひなどの、女にていみじうみまほしう、をかしうもあるかな」と恋しく感じたりするのは、変態的な心理状態である。彼の男装の姫君に対する同性愛的感情は、女装の男君に拒絶されて以後ますます激しくなると共に、一方、密通した四の君の許へは容易に通えぬ苦しさから、かねて「男性ではあるが女性として見たい」と考えていた男装の姫君に逢いたいという欲求も押え切れなくなるのであるが、恋しい二人の女性（四の君と女装の男君）の代役として、その二人に縁の深い美しい男性を、自分の恋情を満足させる対象にするという心理もまた、変態的な同性愛的感情である。こうした宰相の同性愛的感情はますます高まって、「かゝる女の又あらん時、わがいかばかり心をつくしまどはん」と思つて男装の姫君に乱れかかり、密通してしまうのである。この密通の場面は、怪しい美しさに満ちている。宰相中将は、男装の姫君を眞の男性と思ひながら、同性愛的感情によつて姫君に乱れかかったようだが、本当は姫君を女性だと宰相は潜在意識で感じつつ、姫君の方へ引き寄せられたのではないかと思えるような場面である。

自らは眞の女性であつて男装をしていると十分自覚しつつも、他の女性が男装の自分に恋愛感情を抱いていると知ると快感を覚える

といった女主人公の心理状態は、やはり変態的な同性愛的感情と考へてよからう。そして、注目すべきは、女主人公の同性愛的感情が、男装当時においてのみ現われていることである。宰相との間に子供が生まれてからは、母性愛の描写が目立ち、同性に対して変態的感情が動くといった描写は見られない。男装ということが、女主人公の感情までも変態的にしたのか。自分は女性であるのに、そうとは知らず眞の男性と思つて他の女性は慕ひ寄つてくる。そこに言うに言われぬ優越感と快感を覚えていた女主人公は、倒錯した感情の持主であつたのだろう。それが、子供の出産によつて、自己の中の女性に目覚めるのである。前半の頹廢性の濃い描写から、後半は一変して母性愛に富む場面が多く出てくるこの物語は、矛盾した二面性を持ちながらも、読者を魅了せずにはおかない。

三

『とりかへばや』には、平安時代の根本精神たる権勢第一主義という、現実的立場が見られる。結末を見ると、男主人公は関白左大臣、好色の権中納言は大納言を経て内大臣、女主人公は中宮となり、四の君腹の大姫君は女御として入内することになっている、このことから権勢第一主義が窺える。

女主人公の愛について見ると、そこに見られるのは彼女の肉親への愛だけである。男女間における眞の愛の追求は、この物語には存在しない。官能的、性愛的要素に傾いた恋愛がここにはある。官能的、頹廢的描写があるかと思えば、強烈な肉親愛が次の個所にはあ

る。女主人公が同性愛の傾向があるかと思うと、後半には女主人公の子供に対する愛情が満ちている。一人の男が、他人の妻と通じ、その男の妹にも懸想し、挙句に今まで男性だと信じていたその男（実は女）とも通じてしまう、これからどうなるのかと思うと一変して人情話的になる。矛盾した二面性を持ちながら、『とりかへばや』は今日まで残って来たのである。

『とりかへばや』の嘆きの根源を前世に置こうとする宿世思想の見えるのは、当時の物語として当然である。末法思想の単純な理解と、階級没落に伴う漠然たる不安感や厭世思想、これらが『とりかへばや』に見られる仏教的色彩である。『源氏物語』では愛欲と反省的批判的なものが葛藤して、厭世に至る経路を見ることができ、中世の文学では、現世的なものは仏教の教理によって否定されるべきものとして描かれている。『とりかへばや』では頹廢的現実が、漠然たる仏教的厭世観、感傷主義で統一されている。しかし、作者の態度・作品の気分は統一性を欠き、不安定であり混乱・不調和であることは否定できない。『とりかへばや』は院政期社会の頹廢、混乱、矛盾、無秩序など、その中に生きた人間の苦悩、不安、動揺の世界なのである。これは、あくまでも現存本から考えられる可能性であり、現存本は余りに感傷的、形式的類型的すぎる。作者はこのような世界に生き、そしてその犠牲者であるが、このような世界を描き得る動けない目と、確かな批判的立場に立つ人ではなかったであろう。ここで、我々は『無名草子』に記されている古本を思い出すのである。古本とは原作であって、今では失われたと思われる伝

わっていない。今本とは、古本の改作本であり、『無名草子』に記載されているので、『無名草子』の成立（一一九六年から一二〇二年頃か）以前に成立していたといえる。古本は更にそれ以前に成立していたはずだから、『とりかへばや』は、大院政期にその原作が成立して、院政・鎌倉にまたがる前後の時期に、現存本系統の改作本が成立したのである。

古本が伝わらないので、その内容はわからないが、『無名草子』によると、「詞続きもわるく物恐ろしく、おびたゞしきけしたるものさま」が奇抜すぎて、特に女主人公が、「響ゆるがして」つまり男装のまま子を生む「いみじけ」なる様や、「いときたなし」と言われている「月毎の病」の描写、「夥しく恐ろしけれ」と言われている女主人公の蘇生、「まことしからぬ事ども、いと恐ろし」き鏡の影による透視など、この上なく不自然で非現実的要素を多分に含んだ物語であった。大体『無名草子』の古本を批評した部分には、「恐ろし」、「いみじ」、「まことしからぬ」という言葉が多く用いられ、古本が大変あくどく、どぎつい印象を残す物語であったことが窺われるのである。

しかし、今本は、「何事も物まねびは必ずしもとは劣るわざなるを、これはいとにくからずを、かしくこそあめれな」と、『無名草子』に評されて好評である。また、「中納言の女になりかへり、子産む程の有様も、尚侍の男になる程も」今本の方が良いとしている。もとの本では、「もとの人々皆失せていづこなりしともなく、あたらしう出で来たる程、いとまことしからず」だが、今本で

は、互いにもとの人に入れ代わって出て来るのなどは、まことに現実的、自然的である点、よく書かれていると『無名草子』に評されている。これらの『無名草子』に記載されている言葉から考えても、現存本が『今とるかへばや』であることは疑いない。その『今とるかへばや』も、原作の面影を残すのではなく、全面的に書き改める、いわば創作と同様の方法によっていることも、諸家の考証^(注四)によって、現段階では確定的といえそうである。

『今とるかへばや』は、人名などはほとんど古本と同じであり、男女取り違えることも同じであるが、筋の上で大分相違しているし、気分も全く別種なものだったらしい。『無名草子』は改作本と近い時期に成立したため、情緒的にも、宗教的にも両者は類似した傾向に立っている。これが『無名草子』をして、改作本を高く評価させた理由である。

しかし、原作のグロテスクな要素を削って、健全な時代の趣味に合うように改作されたことが、はたして、『今とるかへばや』のような作品にとってプラスであったかどうか疑問である。混乱と無秩序、恐怖、あくどさ、怪奇こそ『今とるかへばや』的な世界でなければならぬ。そこには、院政期の腐敗と頹廢が、生々しく表現されていたかもしれないからである。

参 考 文 献

- (注一) 『鹿兒島日本文学』昭和七年五月号所載。
 (注二) 『古典発掘』、後『王朝の文学』所収。

(注三) 「とるかへばや物語に現れた愛情」『平安末期物語の研究』所収。

(注四) 松尾聡氏「とるかへばや物語考証」『平安時代物語の研究』その他。

田辺つかさ氏「取りかえばや物語の怪奇性その他」(鹿兒島日本文学)昭和七年五月号所載)

塩田良平博士著『古典の伝統』、今井源衛氏『日本文学の歴史』第五卷

鈴木弘道著『平安末期物語の研究』など。

本稿は、昭和四十七年度卒業論文の要旨をもとにして抄記補足したものである。